

虚実論の系譜（続）

原 田 芳 起

一、前回とのつなぎ

前回、後半を「虚実論の系譜（その一・素描）」としているが、体裁上も未完・不整頓であった。続けさせて頂く。契沖の「勢語臆断」（伊勢物語注釈）などの古典研究史からの線と、曲亭馬琴の序跋・随筆類の中に見られる多彩なる、且つ、極めてスケールの大きい小説評論からの線を考えて、近世に於ける小説虚実論の大まかな輪廓を素描してみた。

学僧契沖と作家批評家馬琴と、奇妙な所で近づき、そして離れる。一は中世の古典学からの脱却を志向する古学的実証主義、一は近世・近代の小説理論を樹立しようと企てていたかに見える庶民文芸界の梟雄、その立場で、小説は如何なる者か、又如何にあるべきものか、何が善き小説であり、悪しき小説であるかを論じようとするも

のである。同じ線の上に並べて見るのは必ずしも正しい事ではない。ただし、この両者は同じ時代の空気を呼吸して生き。そして考えている。問題の「文芸における虚実」について、その言う所に相似の点があれば、関連させて考察して見る事も一理なしとも言えない。契沖は「伊勢物語」の「虚」と「実」との問題について、

かやうの物語のたぐひは、もろこしにも、虚実をまじへ書くよし五雑俎といふものにかけてり。然らざれば文勢なき故なるべし。此の物語も実録ならぬ事多く見ゆるは、さる故と見てあるべし。

（勢語臆断）

彼がこの物語を全く実録でないとも見ていない事は、自記か家集にもとづいて創作したものであらうと仮定している事でも明らかである。だが、この創作的見地を認めようとして、伊勢物語評論の基底に置いたのは契沖に始まるという事は確かである。

これはしばらくおいて、馬琴も五雑俎を引いて、小説が虚実をま

じえて書く事を記し、その巧拙を小説評論の尺度に据えている。彼の隨筆雜纂「玄同放言」(隨筆大成第三卷所収)には小説評論に關する文章を多く載せていて、その中に、「詰々金聖嘆」^一と題する一文がある。

謝肇制シヤウヂョウシが小説を論じたる、西遊記を第一とすべしと言へり。又云、惟三國演義与三錢唐記・宣和遺事・楊六郎等書、俚而無味。何者ナレバ、事太ハナハダ実ニシテ則近チカシクレ儂ニ、可ク以テ悦ハシムニ里巷小兒コ一、而シテ不レ足ル為スニ士君子ノ道ト也。又云、為ツクラレ小説及雜劇戲文、須カラ是虚実相半、方ニ為ニ遊戯三昧之筆ト一、亦要アル情景造イダシク極ニ止ム。不レ問ハ其有無ト也。

(見五雜俎卷十五人事部第三)といへり。

小説戲文の巧拙取捨は、論じて得てこゝに尽せり。

契沖と馬琴とが、五雜俎を引いた事も、小説の虚と実との問題を論じた事も、これは時代であつたろうと思う。馬琴が「勢語臆斷」を読んでその示唆を得たか、両者が共に「五雜俎」を読んで、それぞれに小説の虚実の論を開発したか、どちらでもあり得る。「五雜俎」のような支那の学書が、篤学の士には容易に手にする事が出来る時代が開けて来たという事だけは確實に知り得る。こんな事をうさく考えて考えあぐねた事が、そんな昔の思い出があつた。

私に取つて今は随分と昔の、古めいたくり言になつて恐れ入るが、私に「日本小説評論史序説」という旧者がある。昭和七年十二月大同館書店発刊となつてゐるから、その未熟さ幼稚さは思いやられる。今思つても甚だむこう見ずに風呂敷だけ大きくひろげた物で、ただ

いま人前に出せるようなものではない。問題だけは「序説」の名の如く広く浅く触れている。その第二編は、「古典研究と物論評論」として概観している。その中で「勢語臆斷」を取り上げて、古典学に於ける近世が、中世から脱出を試みている点を見ようとした。私の当時の関心は、伊勢物語研究史に於ける中世と近世、近世伊勢物語注釈の評価と位置づけであつた。特に伊勢物語に於ける物語虚実論の展開であつた。それは項を改めて纏まりをつける事にしたい。

馬琴の小説論義の中の虚実の位置づけについては、右の旧著の第三編「近代小説論の発達」の部門で、かなり詳細に述べてみたつもりである。当時は、私は片田舎に住んで中学教師をしていたので、史料を調査してとなると、極めて不完全、貧弱極まるもので、一行の文章を書くにもおっかなびつくり、盲亀の浮木のたとえに近い、よくもあんなわかつた風な事を書いた事よと恥ずかしい。だが、完璧な事を言えるまで待とうとなると、あるいは黄河の水が清むのは何時かという事になりそうで、いまだに殆んど前進していないのであきれるばかりである。右旧著では第三編の「八」で、「表現思想としての虚実論と写実論」という項を設けて考へている。馬琴の小説論は当時としては頗るスケールの大きなもので、それが彼の隨筆的文章や、作品の序跋に書き散らされているが、総合して觀察すると、右のような断片的な詞章は、それを見事に活用して彼の小説評論の論陣を張つてゐる。小説虚実論、小説写実論、勸懲主義論、文外隱微之説など、現代のわれらを納得させる言葉が少なくない。始めて近代的小説論と称し得るだけの理論に到達し得ていると私は評

価した。

作家批評家としての曲亭馬琴（昭和八年、雑誌「國漢研究」に投ず）

馬琴の小説批評（昭和八年「クオタリー日本文学」に投ず）

馬琴の俳論と小説論との関係（昭和八年十一月稿「近代日本文学論の胎生」の第四節として執筆、後に「日本文学—九州—」に載せる）

（右の諸論考は、「日本小説評論史序説」以後に執筆したものである。）

これらの馬琴の文学批評論の持つ意味についてもやはり独立の項で改めて考えてみる事にしたい。

二、伊勢物語研究の中の古学的方法

ただ今、月例として大阪国文談話会中古部会で「伊勢物語」の会読を行なっている。私も体調の許す限り、席末に列して、時に無用の弁を述べてみたりもしている。講師は増田繁夫氏担当。なかなか熱心な人々が集まっておられる。それで昔の事を憶い出したりするのである。伊勢物語研究史を通観して、中世のそれと近世のそれとの本質的な差異は、はたしてどのあたりにあったのかなどと考えてみた頃の事を反芻してみる。

中世の古典学は主として師の学問を伝えた上に立つてみずからの所見を加える。近世のそれは、古学的方法を信条とする実証主義であるが、一応は彼は陳腐此れは清新と考えられた事もうなずける。同時に古学にも方法的欠陥はあるし、特に言語理論の面では、いま一度中世古典学の到達点まで立ち返って考え直す必要があるような

事例も勿論少なくはない。

それはそれとして、「勢語臆断」の没すべからざる卓見とすべきは、「伊勢物語」はまず物語としてすなおに読むべしとした点にあったのではないか。

此物語と古今集と相違の事あり。彼は勅撰なればたしかにて、これは物語なれば筆にまかせたる事あるべし。後撰集・拾遺集、是に准ふべし。（国文学注釈叢書勢語臆断の始めに、国学院大学蔵四冊に據るとして加えられた所による。後の書き加えか。）

ここに「古今集」とあるのを、「集」と置き変えても本意は変るまい。伊勢物語は物語である。歌の集ではない。実録ではない。物語としてすなおに読むべきであるというのが、『臆断』の本意である。勅撰・私撰に局限される事はあるまい。「集」と「物語」とを別のジャンルとして考えるという事が重大であろう。

文芸のジャンルに於ける虚実のかわりを考えてみると、「集」は実、「作り物語」は虚、「歌物語」は実を虚で包み脚色したと見る事が出来る。「歌物語」は虚を含むが故に「物語」の類となる。「集」立て前としては虚を含まないという性格で日記・随筆・評論等の類と括られる。だが、「集」と呼ばれても、純粹に実録である事は不可能に近い。詞書や左注等になると、撰者の想像・解釈を入れる事は不可避である。「日記」の中にも、自己を客体化して第三者の如くに語る部分を包摂する事はしばしばある。「男もすなる日記というものを女もしてみむとて」などは、その顕著な例である。

「伊勢物語」・「大和物語」などの中の歌と物語とでは、歌びとと物語者とは別個である。物語は実事実録の枠に捉われないうで、物語化する事が可能になる。面白くも、おかしくも、悲しくも語る事が可能になる。

歌物語である以上は、歌は実として伝承され愛誦された歌でなければならぬ。作り物語である事は許されない。だが、まことの歌ではあつても、少なくとも場面の解釈や鑑賞は語る者・読む者の自由になされる。そこに「集」とは違う「物語」の領域があり得よう。契沖が「これは物語なれば筆にまかせたる事あるべし」と言ったのは、こんな意味あいであつたであらう。

契沖は、全体を一律的に規定する事をしなかつたので、文献に徴してその事実の有無を云云する方法を取つていたので、後の斎藤彦磨の「勢語図説抄」には、「臆断はいと／＼よろしかれど、此物語に深くなづみて実録の如く説きなされたり」と、心外と思われるような批評を加えたりもしている。「勢語図説抄」は、「伊勢物語」は実録にあらずという方向に傾いたもの、真淵の「伊勢物語古意」の説く所、「今云昔々のあとなし物語に同じ」、「こよなき心やり種とぞなれりける」という趣意に同じたものであらう。

だが、「臆断」は、「虚実をまじへ書く」ものだというあたりに「歌物語」の位置づけをした物であるから、「古意」の言う如きあとなし物語とはしてはいないのである。作り物語ともジャンルを異にし、集や日記とも別なものである。そこに「歌ものがたり」は定位置を保持する。

集は実録にて、こは物語なればかう作れるなるべし。(百六段)

作れることなればそのままに見るべし。(六段)

此段は作れるなり。(十二段)

此段作物語なり。(二十三段)

「作れるなり」とある事は、この物語のこの章段のこの話の部分は作り事である。歌は実の詠作または伝承である。物語の部分は、実事・実際に拘束されない。虚実相混するのである。いわゆる「はなし」の要素がはいり込む事を嫌わない。面白く読ませる。物語に興味を持たせる。「作り物語」的要素が、脚色として加つている。

思うに、「臆断」が学問として進境を見せているのは、歌物語のジャンルの本質を指摘してくれている点にある。集は実録だが歌物語はやはり物語文学の中の一つのジャンルである。実の中に虚を加える事を拒まないのである。全くの実でもなく、全くの虚でもない。彼が説く虚実は、「三体詩抄」の説く所と甚く相似る。「虚トハ意ニ所思ノ理事ゾ。理事ハ無レ形、故為レ虚。実トハ眼ニ所見ノ景物ハ有レ形。サテ実ノ中ニ合シ虚事ガアルゾ」(三体詩法抄)。歌物語に宛てて考えれば、歌は実である。これは作者が加える事も減ずる事も許されない事実である。物語は作者の所為である。作者が作る事も、つまり加減する事も脚色する事も、かなりの範囲で許容されている。(その許容の範囲はとりどりで、それによって説話集に近づいたり歴史物語に近づいたりもしている。)

私はまた思う。伊勢物語に作り物語の要素がまじっている事は『臆断』『古意』等の古学主義が始めて言ったのではなく、中世の

注釈でも随分指摘している事であった。『伊勢物語愚見抄』以降の伝統を引く「肖聞抄」「惟清抄」等々の注釈も決して、実に執着して虚構を受け入れないという者とは限らなかつたのである。「臆断」『古意』等が文献主義・実証主義を強調しているのとは、区別を示すとしても、中世の学風に批判主義が皆無であつたわけではない。たとえは、

又或説、奥州などの遠き名所をいへるは、業平是まではくたり侍らねど、歌につきて其所にてよめるやうに書なし侍り。是つくり物語の習也といへり。此説は誠に一理あるに似たり。

(愚見抄)

あくた川 ちりなどがすと云云。まことに一禪の御註にも此事を一説として如^レ此^レあそはされたり。実には此^レ名なし。作り物がたり作法にや。(肖聞抄)

あくた川 作り物語なれば、禁中のあくたながす川など云々儀にも及ばず。只あくた川といふ川にてをくべし。(惟清抄)

伊勢物語研究史に於ける中世の復権を認める事は極めて大事な事であろう。そこで『臆断』の卓見は、今日から言えば格別に奇抜な所もなく、「集は実録にてこは物語なればかう作れるなるべし」(百六段、「作れることなればただそのままに見るべし」(六段)と、無理な力を抜いた批評にこそ見られるであろう。それは奇しくも(あるいは当然にも)、『惟清抄』(舟橋宣賢)の「作り物語なれば……只あくた川といふ川にて置くべし」と符節を合わせる。中世歌学が近世古学だとあながちに大声をあげて区別を叫ぶまでもない。真実が

真実であればよいわけである。

旧著でも言及したが、『臆断』の位置は、物語の本質を明らかにし、物語批評を物語批評として出発させようとしている。あらゆる先入主を意識的に退けて、物語のあるがままを享受し批評しようとする。近世に於ける内在批評の完成は、契沖によって際立って近づいたと見る事が出来る。

思うに、伊勢物語の本体・本質を見究めようとする時、虚実の問題が最も大きくかかわってくるのが当然である。『知頭抄』の昔から、この物語が歌書であるという観点で専ら考えられており、物語部分に関しては歴史的事実との関連が主として取り上げられている。

『知頭抄』では、物語のなぞめいた表現が、いかなる史実を意味するかが模索されていると見える。『知頭』とは、字面に隠されている史実の意味を顕現するという名であつたらう。これも表現面の虚と隠された実との関連が問題であつた。『愚見抄』以後になると、物語部分に、作り物語的な趣向がまじる事がある事は指摘される所があり、歌にも業平ならぬ者もあり、物語に於ける虚構の問題が伊勢物語研究史に沿うてふくらんでくる。この問題がそのままの方向で近世に連続している。『臆断』が「かやうの物語のたぐひは、もろこしにも虚実をまじへ書くよし、五雑姐と云ふ物に書けり」と断じ、伊勢物語がそのような「虚実まじえ書く物語」と弁じたのは、物語学研究史の上に一つの峠を越えた者と認められよう。契沖は恐らく伊勢物語注釈を進めて行った結果の断案として右のように説いたのであろう。国文学注釈叢書に採られた国学院大学蔵の「臆断」

の巻首に本来には箋の形を付加された文であったかと思う。

契沖は伊勢物語を全く実録にあらざると見ていたわけではない。だが物語としては創作的要素があった事をはっきり認めようとしている、その方向に数歩を進めている。

真淵の「伊勢物語古意」の中の「総論」は、契沖の見解を前進せしめようとしたすぐれた物語評論であったと思うが、論の当否はどうであらうか。

かゝるふみを物語と名づける事は、実の録のことくはあらで、世の人の語り伝へ来し事を真実虚実をも問はずそのかたるまゝに書き集めたるてふ意にて、今云ふ昔々のあとなし物語に同じ。しかはあれど、文よく書きたれば、こよなき心やり種とぞなれりける。

これが総論中の総論であらう。すべて「物語」と名づけられる事の意味は、伝承をそのまま語るのが「物語」という名の本有の意味であったというのは、一応はうべなえる。だが、これを物語文学全般を総括する定義とするには、作り物語とか歌物語とか呼びならわしているものを包括し得ない欠陥がある。作者が想像を加え、主題を持って描き上げる創作文芸を忘れてゐる。これでは、「聞き書き」「説話集」などしか、物語でないと言っているかに聞こえる。古代に「かたる」と言い、「かたり」と言ったのは、なる程「伝承」と関する話説する事を指したのであらう。「いなと言へど強ふる志妻能が強語りこのころ聞かずてわれ恋ひにけり」(万葉)の強語りが物語世界であつたに違いない。語り手と聞き手とがあれば物語が成り

立つ。右の真淵の物語定義は、「上古の物語は」と限定すべきものであつた。

真淵の物語総論は、一言に尽くせば物語そらごと論であつた。それは恐らく源氏物語の物語そらごとの考え事が影響があつたろう。

真淵は物語各論で、伊勢物語・伊勢物語等は、「ここにありし事を、あらぬように」書きなす故に「そらごと」であり、宇津保・落窪の物語は「よれる所もあるか、さだかに言ひがたけれども、まづはそらごと」と説明する。大和物語・今昔物語等は、「みづから巧めるにはあらで、人の語るままに書きたれば、実も虚も、又いと実録なるも交れり」と説明、榮花物語は「実の事なるを、しばらく物語とは名づけたり」という風に概説する。物語文学の類を大まかながら分けて、「作り物語」と「説話集」と史籍の物語化としての「歴史物語」と分けようとしている。面白いと思う。だが、「伊勢物語」と「源氏物語」等を一につに寄せて「日本にあつた事をモデルとして仮作物語」と括ろうとしたのは、甚だ奇妙である。「伊勢物語」を「源氏物語」等と同じく「作り物語」として解釈した事を示す。

「伊勢物語」は「作り物語」であり、「大和物語」は伝承の物語の聞き留めであるとして別の類に収納されている事は、おかしな事だが、全くわからぬ事ではない。

思うに、「伊勢物語」の中にも、業平の歌でなく古伝承に若干の創作を加えた者があるし、「大和物語」の方がその種の伝説を語る者があり、その差がそのまま「今昔物語集」の世界に向かつてなだれてゆく。「榮花物語」・「大鏡」以下の歴史物語の類の、物語と呼ば

れる事の意味は、いかに理解したらよいか。歴史は仮名ぶみで記されても歴史である事には変りはない。今日われわれがそれらを「物語」というジャンルの中に収めているには、それだけの理由がなければなるまい。これらには物語るといふ形がある。作者はそこに自己を見え隠れさせつつ、作品に結構を与え、虚構を加えもし、主観的な表現を参加させもする。その点では、日記・随筆の類も、広義には物語である。その点を念頭に置いて、その上で「作り物語」「歌物語」「説話文字」「歴史物語」「日記・随筆」等の類別の中に整理して見たらよい。

真淵が、「伊勢物語」を「源氏物語」と同列に収めようとしたのは誤りとするしかないが、歌物語部分を「そらごと」とであると見なす事で契沖と離れて独自の見解を試みた事を、伊勢物語研究史の中で全く意味のない事とも思わない。虚構の幅を多少拵げて解釈するという一つの見地を示したことは認められる。

歌物語の場合、歌は物語と別に、既存の伝承である。これを読み、鑑賞する読者は、それぞれでその歌の持つ場面を想像で補いながら、再現してみる。ここでは、自由に歌を構成する人物や事件を想像して見る。その想像された世界が歌物語を作り上げる。

歌とか俳句のような短詩形文芸は、一旦、社会の中に所有されること、作者から離れて独り歩きを始める。「去来抄」に「岩鼻やここにもひとり月の客」という発句について、作者は去来で、芭蕉が「汝この句をいかに思ひて作せるや」と質問した。去来は「明月に山野吟歩し侍らに、岩頭一人の騒客を見つけたる」と申す。師は「こ

こにも一人月の客と、おのれ名乗り出でたらんこそいくばくの風流ならん。ただ自称の句となすべし」と教えたという話がある。句をめぐる作者の語る場面構成と、その師匠の芭蕉が解釈する場面構成の説明とがまるで違う。句自体は作者と読者で独り歩きをしている。作者が読者の解釈を支配する事は出来ない。

然らば歌物語に於ける物語部分は、本の歌を自由に歩き廻った結果である。「昔男ありけり」の男が在原業平でなければならぬという事はなくなる。ただたとえば元服直後の美しい貴公子であればよい。それぞれの段で、勝手に、人物の年令・地位・境遇などを想像の中で作り上げても構わない。史実を考証する事は、その方の学者に任かせてもよい。読者は自由に想像世界に遊ばばよい。

三、近世小説評論の発展と曲亭馬琴

始めに触れたように、『臆断』が「五雜俎」の説を引いて、物語文芸の類は、虚実まじえて書くと言いたのは、日本の物語文芸の類も支那の小説類と同種の物と見た事になる。取りわけて、「伊勢物語」の非実録性・創作性を認めた事を示す。

やや時代が下るが、馬琴も同じ「五雜俎」を引いて、小説及び雜劇戲文は虚実相半ばすべく、まさに遊戯三昧之筆たるべく、又情景その極に造る事を目標とすべしと説く。これが、そのまま作家批評家としての馬琴の小説論の基本となったと見られる。彼馬琴が著作性命を摺り減らして行った。敢えてその道を選んで男子一生の事業

とした生涯は、「戯作三昧」に外ならなかった。「情景、極に造りて止む」というのは、文芸としての戯作の理想であった。

これは私の解釈であるが、馬琴という人間は戯作の価値を二つに分けて考えていた。劇作（文芸）の社会的価値と芸術的価値との二元に分けて考えていたかと思う。文芸の社会的価値は「勸懲」、芸術的価値は「情景極に造りて止む」の所の「文章」の美であった。

この二元的思考は、「八犬伝」等の彼の作品に付された序跋に一貫して現れる。思うに、この二元論のジレンマのようなものは、不思議と明治の文芸に尾を引き、大正・昭和の文芸に及んで、永遠の課題を残す事になる。この問題は、あとでまた触れる所がある。

さて、馬琴の右の論は、もともと支那小説に於ける、清の金聖歎という人の「水滸伝」批評に対する反論を契機として展開されたものである。題して「詰三金聖歎」という。まことに厪大な評論である。「玄同放言」（日本随筆大成卷三所収）の「第四十一人事」の中に入っている。金聖歎が「人滸伝」に外書批註して、第七十回まで元の施耐庵作とし、七十回以下は羅貫中が継いだ者とし、王望如も賛同しているが、王氏の論は弁ずる足らず、聖歎亦よく小説を見た者でないかと詰っている。（馬琴は水滸伝は全編羅貫中作であり、金聖歎の説はでたらめであるとする。従うべきであろう。）

この「詰金聖歎」という一文は、馬琴の抱懐する小説論・小説批評論を引き出すきっかけとなったのであろう。その基底をなしていたのは、彼の戯作者としての創作体験の中で胸中に去来した、抱負や懷疑やもろもろの感想が金聖歎の水滸伝批評に反撥する事で一度

に噴き出したかの如くである。金聖歎が一方で「西遊記」・「三国志演義」を都べて好からずと貶しながら、他方「三国志演義」を評する日はこれを第一とするなど、両舌、媒婆の如き矛盾を攻撃している。かくて何が好き小説であるかが問われて来る。謝肇制は、小説を論じて「西遊記」を第一とすべしとする。「三国志演義」等は「俚にして味無し。いかにとなれば、事太だ実なれば則ち腐に近し。」と言っているに対しても、馬琴一家の別の見解を述べている。この見解の中には、彼の小説虚実の論の明確な意見を示しているようである。

但、三国演義の、「実に過ぎたるをもて云云」といひしのみ感服しがたし。彼の書は所謂、虚実相半ばするものなり。且、陳寿が「志」には三国の本紀列伝、紛員として一朝に通覧しがたし。「演義」に至りて、三行君臣の終始を話説するに、素れたる糸を解きて、撃めて簀わに掛けたる始し。その才の世に傳れたるにあらざりせばなしがたかる事になん。よりておもふに「三国演義」は作者の胸膈より生み出せし趣向にあらず。こは天作にして、自然の妙処多かり。水滸伝は作者の肚裏より作り出せし趣向なり。こは人作にして、その才亦傑出せしものなり。譬へば生花と剪綵花の如し。剪綵花の美なることは寔に美なり、しかれども造花自然の微妙に及ばず、又おもふに小説の批註は毛宗崗が三国演義の評論、滑稽いと多かり。金聖歎が理を推し史を引きたる外書には遙かに優れたり。この他の諸演義は謝氏の論ぜし如し。西遊記は尤も妙作なれどもその事怪誕に過ぎて毫

も情致を写せることなし。その書、水滸・三国演義の右に出でがたきこの故なるべし。又近属この間に刊行せし前々太平記・前太平記その他の諸軍記、多くは唐山の演義に似たり。虚実相半ばするのみ、謝氏所云俚にして無味者也。凡そ小説は心を師として作り出せるものなれば、巧拙は作者の才によるべし。

今の草子物語を作るに唐山の小説は本にならず、彼と我とは物みな異なり。さればとて竹取・宇津保・源氏・落窪も本にはならず、雅俗今昔の差別あればなり。その才あるは心を師とし、

(下略)

馬琴の支那小説に対する造詣の深さ、批評眼の適確さ、見るべきものがあると思う。私にこの馬琴評を批評するだけの素養・下地が甚だ貧しいので何かとことあげするのも気が引けるが、それでも、「三国志演義」「水滸伝」「西遊記」を取り上げての比較評論は、問外漢の私などが読んでも、巧みでもあり、教えられる所も少なくない文章である。諸筆制の評言を尺度として彼独自の批評を引き出している。「三国演義」を生花にたとえ、「天作」「造化自然の微妙」さを持つとし、「水滸伝」は「人作」であり、剪り花にたとえられんとする。「西遊記」は「妙作」だが快誕過ぎて情致の描写の見るべきがないとして最下に置く。天作・人作・妙作と並べたのにも、上・中・下の品を分かち文章上の工夫を見せている。馬琴は支那小説の比較から、創作の最高の境地として、作者の肚の中で巧まれた者にあらざる造化自然の味わいを見せる「天作」をひそかに目標としたのであろうかと思う。ともかくこの「詰金聖歎」を草した所か

ら、彼の小説創作への抱負・理想を育てて行ったのかと考える。彼の言う所の、「天作・人作・妙作」の三者を、たとえば、「南総里見八犬伝」にあてはめて見たらどうなるのかと考えて見るのも一興はある。「三国志演義」(勿論「三国志」ではない。あくまでも歴史小説としての「…演義である)は、造化自然の妙趣を見せた上の品だろうと馬琴は評定する。「水滸伝」は趣向の巧みさはあるが造り花である、中の品だとさだめる。「西遊記」は面白いが不自然すぎる。怪奇に走り、人情のくまぐまを写して極致を見せる所がない、妙作だが、下の品である。この評価が、清人金聖歎と意見を異にする。

にもかかわらず、馬琴は金聖歎の影響を少なからず受けている。金聖歎が「三国志演義」を才子之書の第一と賞したのは賛成だが、金聖歎は他方で「如_き西遊・三国_二」は「都不_レ好」と評するのは、西舌「乱説」であって、仲媒婆以下と口を極めて論難する。(これは馬琴の議論好きの性癖でもある。これは人物評であって、馬琴の「水滸伝」評、「三国志演義」評、「西遊記」評は右に述べた如くで金聖歎の批評と反撥したり一致したりもしている。この批評の中から、馬琴自身の小説論が導かれている点にも興味がある。)

馬琴の小説論の二つの柱となる勸懲と人情を尽くすという両者もこの文章の中で導き出される。

水滸伝は、作者の大意、草賊を賢とし、衣冠を賊とす。その筆力、人情を尽くすが如きは、寔に小説の巨擘なり、後世これに加ふるものなし。但、勸懲には甚だ遠かり。その趣向の立てざ

ま善悪正しからず、潔からぬ筋のみあれば：水滸伝を廃斥して可なり。

同様の文章は後の段でも

大約小説は勸懲を宗とせしものならざれば弄ぶに足らず。水滸伝は小説の巨擘して今古に敵手なけれ共、今に論議の多かるは勸懲に遠ければなり。謝肇制が小説を論じたる、西遊記を第一とすべしといへり。

と説いている。ここでも、文芸の芸術（美）的評価と倫理的評価とが対立して二元的に思惟されている。人によって「水滸伝」を最高とし、或いは「三国志演義」を第一等とし、又は「西遊記」を最上とする。これらの批評論の前で馬琴は自分の戯作の方向を考えていたようである。これが「詰金聖歎」なる一文の持つ意味であろう。

馬琴の雜纂隨筆集「玄同放言」は個々の文章の執筆時は勿論わからない。卷末、跋文に「文政元年戊寅皇月十日はじめの二巻を創し果て、後にしるしつ著作堂のあるじ解」とある。息子の宗伯に編集させるために、初めの二巻を草し了えて、このあと書きを書いたのであろう。全編に対すれば一部分である。宗伯は、卷三第四十二までを版にして、亀田鵬齋に漢文の序文を乞うて巻頭に付したらしい。

（巻四以降は卷六第八十五篇と付録と編集されていて未刊）

文政元年（一八一八）といえは馬琴の「椿説弓張月」は既に八年程前に出ており、「南総里見八犬伝」は四年程前に初編が出ている。この「八犬伝」の構想に「水滸伝」からの影響を考えると、彼の

「詰金聖歎」の一文を書いたのはその頃の事であったかと想定されようか。

私は、かつて名古屋から毎月出ていた研究誌「国漢研究」に投稿して「作家批評家としての曲亭馬琴」なる一文を発表した事があったが、その切り抜きに、

元来、金聖歎の水滸伝批評と言うものは頗る有名であつて、水滸伝を世に出したものと云はれ、千葉龜雄氏の文芸批評史といふ（題の）或る講義の文章の中にも、かなり詳しい論評（好意的な）がある位であるが、その中に水滸伝七十回まで正編で施耐庵作、七十回以下百二十回まで羅貫中作であるといふ仮説が出ている。その正統の説及作者の説が馬琴の論難点であつて、ひいては批評論や作品の主題論——隱微論を喚起しているのである。この論難をめぐつて馬琴の文学観、批評観といふものが甚だ多方面に表はれている。云云。

と書いている。馬琴の「詰金聖歎」なる一文は、当時ほとんど注意されていなかった。

四、馬琴の小説批評の輪廓

（この項、一部クオタリー日本文学第2号8からの再録を含む）
滝馬琴は近世以前の、批評家らしい唯一の批評家である。勿論、学者的な批評家は、他にも国学の領域や、歌人、俳人の領域に多数にあつたが、馬琴はそれらとはよほど違った存在である。馬琴を批

評家たらしめるのは、その理論でなくして、寧ろ作品批評である。併しそれは印象批評ではなくて、彼自らの信念では一種の美学的批評であつたのである。

彼の文学批評の全貌を探るのは容易な事ではないが、特に注意すべきもの(批評)をあげると、

- 一 八犬伝の序跋
- 二 詰金聖歎(玄同放言所収)
- 三 騮鞭(曲亭遺稿)
- 四 をこのすきみ(同)
- 五 おかめ八目(同)
- 六 本朝水滸伝を読む并批評(同)
- 七 稗史外題鑑批評(同)
- 八 稗説虎之巻(同)

などがある。彼の批評にはかなり激情的な口調を露わにしたものが多いのは、彼の氣質・性情を示す。この批評を養いにしして、小説に關する意見を培養して行つた観がある。

若干の注を加えると、三は「三馬の鞭」と書き換えた方が便利だろう。「浮世風呂」等で知られる式亭三馬の「流転数回阿古義物語」を批評したもので、徹頭徹尾あらさがしである。

(1) つら／＼この作者の才芸をおし量るに、みづから戯作者と稱しつゝ、虚名をさき高けれども、よく世態情致を写して、かゝる物語ぶみなどを著す才はなかりけり。(三島の鞭総巻批評)

(2) 小説の趣向する所、巧拙はとまれかくまれ、作者に大学問なく

ては、第一勸懲に正しからず。今の小説は、比々として皆これ也。(同書の跋)

馬琴が所有の板本の始め末尾などに記し付けた感想であつたらう。(1)に「虚名をさき高けれども」とあるのは、三馬の「浮世風呂」等に対する世評が高かつた事を認めている。それがかなり癪にさわつていらしい。しかし俗評は高いが、馬琴が求めるような「世態情致を写す」と評価出来るものではない。「その趣向、人情にこたえるもの」でもない。三馬の作品は、それには価しない。(2)小説という者は、作者に「大学問」がなくては、「勸懲」が正しくない。小説は「人情を穿つ」事が必要だが、それは作者の「才」が必要であり、「品位」が必要である。小説に不可欠な条は、第一に「勸懲が正しい」という事、第二に「その文章が情を穿ち、趣を尽くす」という事であると論ずる。三馬の作品評を契機にして自家の小説論を述べたものである。

六の「本朝水滸伝を読む并批評」は、建部綾足の読本様式の小説「本朝水滸伝」に対する読後感ならびに批評を記したもので、馬琴の小説評論としては頗る注目すべきものである。綾足の右の読本は日本の古代(奈良期)を舞台に、支那小説「水滸伝」を翻案した作品で、読本としては初期に属する。馬琴の作品「南総里八犬伝」に對する影響は大きかつたと思われる。その影響の最も大きかつたのは、文章文体の選択に關する問題であつた。

(3) かゝる物語を作らんに雅言もてものせんとしつること、かへす／＼もあやまりなり。そをいかにと言ふに、稗史野乘の、人情

を写すには、すべて俗語によらざれば得なし難き物なればこそ、唐土にては水滸伝西遊記を初として、宋末元明の作者ども、皆俗語もて綴りたれ。こゝをもて、人情を旨として綴る草紙物語に、古言はさらなり、正文をもてつゞれといはば羅貫(中)・高東嘉もすべなるべく、紫式部といふとも、今の世に生れて古言もて物がたりぶみを綴れといはゞ、必ず筆を投棄すべし。(本朝水滸伝を読む并批評)

(4) 文を古雅に、事は今様にして、雅俗に媚びんとほりせしならん。さはれ、事は古の態をしろすとも文は雅俗を通用せざれば、広く行はれがたきもの也。(同)

(3) の方では、原則として世態人情を写実する小説の文体は俗語によるべきであるという事を和漢の古典を例にして説いたのであり、紫式部が今の世に現れたら、現代の口頭の言葉で小説を書いたに違いないというのである。当時の考えとしてはかなり思い切った説で、卓見と評してよからう。この意見のままを実行したとしたら、明治の中程に近く現れ始めた言文一致体小説が一举に実現した事にならう。馬琴も人情世態を写すには俗語でなければという意見にうそはなかったが、小説を書くとなれば、雅語を使ったり俗語を使ったり、自由に通じて用いたらよいという。それを(4)の方では、「文は雅俗に通用せざれば広く行はれがたきもの」と書いたのである。思うに馬琴はこう思っていたのであろう。「雅俗を通用」というのは、自由に雅語・雅文の世界に入り、俗語俗文の世界に入り、両者の美をほしいままにする」と願ったのではなからうか。「雅俗に通用」の

「に」はどういう事なのかをそう解釈して見る。

一の、八犬伝序跋が馬琴の小説論に関する最も大きな資料である。私は「日本小説評論史序説」を書いた時に、主としてこの八犬伝の序や跋の文を資料として、評論史的な意味を考えて見た。近世の小説文学は、西鶴・其磧・自笑らが小説を「慰み草」と見たのを始めとして、近松果林子も浄瑠璃芝居に就いて、虚実と慰みとの関係で芸という物を考えた。馬琴らの時になると、馬琴だけではなかったが、勧善懲悪という倫理的要請と慰みと虚実のかねあいの中で小説の世界を考えるようになって来た。権力の強圧も勿論あったが、民衆の倫理観の啓蒙をおのれの使命であると自己を鞭撻して行ったのであろう。好むと好まざるとに拘わらずこうするしかないと言った消極的気持で、あのような、八犬伝の如き超大作をものするには至れなかつたであらう。

(1) 宣ナル不レ入リ耳ニ。稗史雖レ無レ益ニ於レ事一、而レ寓スルニ以テ勸ニ懲ヲ、則レ令シテ説マ三之婦幼ニ、可シ無レ害ヲ矣。

(八犬伝第七輯)

大声俚耳に入らずというのは尤もな事である。それに比べれば、小説は無用な物だが、その中に勧善懲悪の微意を含めれば、幼い者や婦女子の読物として少なくとも無害である。

(2) 信言不ト美ヲ可シ以テ警ニ後学ニ。美言不ト信ヲ。可シ以テ娛ニ婦幼ヲ。(同第二輯)

美と善との対立を認めるが、道徳の勧めと小説の面白さが相俟つて、勧懲と娯楽とを与えるのが稗史小説の世界である。民衆の文

学愛好を利用し、勸懲の外在目的を果たすことを目的とし、それを主張とし、理論化を生ずる。その代表選手が馬琴であった。彼は善くも悪くも合理主義者であった。

右に述べた八大伝第七輯序の文学無用の説に、もうすこし長い論説が付いている。原漢文だが、仮名交りに書き下して見る。

(3) 或る余人が言を聞き、之を嘲笑つて曰く、神史歴史記、無用之冗籍、工を費やし椽を災し、安んぞ道ふに足らんやと。嗚呼、無用を憎む者、用の用たる所を知らざるなり。人の一身、貴も無く賤も無く、起臥する所一席に過ぎず、然れども多席無用之者と為して之を廢して可ならんや。無用者有用之資なり。余も虚文を貴ばず。好む所は乃ち経籍史伝旧記実録なり。而るに毎歳著す所、神史小説に非ざる暮し。然る所以の者は何ぞや。書買利を揣りて以て余に求む。年々に著さんと欲する書は、書買刻む事を願はず、既に已に無益かくの如き書を著して三十有八年、茲に潤筆以て有用之書を購ふ。則ち用と無用と、得て分別すべからず。宣なるかな、大声俚耳に入らずとは。神史事に益なしといへども、寅するに勸懲を以てすれば則ち婦幼に誦ましめて害なかるべし。(同第七輯序一部前引)

ここは半ば逃げ口上で、しかし半ばは本音の文学論である。

右と同様な、作者としての理想とみずからの生活とのジレンマは、八大伝回外剩筆で繰返して筆にしている。これも作家としての生業の複雑化という近代的現象であった事も見のがせまい。曲亭馬琴はある意味では文学否定論者であるうともしていた。この翁を止む事を

得ず神官者にしてしまったのは今の世の中であって、天なるかな命なるかなと長嘆させられるとも記す。(回外剩筆)しかし、彼の本音として文学論は、漸くにしてその理論化を進める。

(4) 野史用_レ心、仮_二彼名_二而新_一其事。於_レ是乎、善可_二以_レ勸_一、惡亦足_レ懲乎。君子尋_二文外隱微_二而解_レ悟深意_一、婦幼代_二日_レ觀場_一而不_レ覺_レ春日秋夜之長_一(同第七輯)

ここで馬琴の文章の中に「文外の隱微」という語が出る。第九輯簡端附言にも、

(5) 夫、隠れたるを求め怪しきを述べ作る小説野乗の果敢なきも、其の大筆に至りては、必ず作者の隱微あり。是を弄ぶ者は甚だ多く、是を悟者の得易からぬは、昔も今も同じかるべし

とある。馬琴の小説批評観でもあるが、彼の小説本質論を示すものでもある。

彼の言う隱微とは、つまるところは勸懲という小説主題である。彼は「水滸伝隱微發明評」という者を著したいという事を卷二十九簡端或説贅弁の中間に言っているが、そういう外題の文学を見ていない。その外題を有する彼の文があったとしてそれは、八大伝卷二十九簡端或説贅弁と称する文の中で述べているのと同じ趣旨であったらうと思う。

思うに馬琴の「水滸伝」に関する批評は、かの「詰金聖歎」から「八大伝」の構想が次第に形を成すまでの間に、重要な転回をしている。前者では、水滸伝は小説の偉大な作品で、今古に敵手がないが、勸懲に遠い。それが欠点だとしている。「水滸伝は廢斥して可

なり」とまで言っている。だが八犬伝巻二十九簡端或説贅弁」では、「水滸伝」もまた勸懲の意を外に顯さないが、隱微の間にそれを寓している。「水滸伝」は、怪談を以て趣向を立てているが、始めに石碯一名八箇の魔君を走らせ、終りに石碯一百八箇の魔君を治めて、遂に宗朝の忠義の士としたのは、作者の一部の大趣向であり、作者の隱微はここにありと説いている。

「水滸隱微発明評」という外題を有する文章または著書を見た事がないが、その内容ははっきり見当がつく。「八犬伝巻二十九簡端或説贅弁」に見える水滸伝を尽くされているのである。巻三十六の巻末には、「この故に吾亦戯に水滸の隱微を發揮、国字評して、命じて拈花窓談といはまくほりす。さりけれど老眼年々に衰退して、今は筆硯不如意になりぬ。果たすべきや否やを知らず」と記している所から推して見ると、かの「水滸隱微発明評」も、その名の小著述を予定してその実現を見なかつたのもあろうかと考えている。

「水滸伝」は馬琴の稗史小説創作の原点となつたもの、少なくとも模範・手本となつたものと見なしてよからうかと思う。

彼は「女同放言」を書いたところは、「水滸伝」をそれほど高く買わなかつた。しかし、その小説としての出来ばえ、筆力については、「小説の巨擘」と評している。その推賞する所以は、「その筆力、人情を尽くすが如きは寔に小説の巨擘となり、後世之に加ふるものなし」というに あつた。ただ勸善懲惡という教訓的な者には甚だ遠いから、作としては取らないとしていたが、馬琴は後年「八犬伝」を書きに至っては、多くの点で「水滸伝」を手本にしている。作の規

模としては「水滸」に学ぶ所があつて、これに勸懲の主意を加える。そこで「水滸」は趣向は怪談に取るが、作者の隱微は實は勸善懲惡の意を持つていたのだという水滸伝解釈の転回を凶つた。

馬琴の饒舌な序跋類まで全部に当たつてというわけにはゆかないが、ほぼ彼の意見のアウトラインをなぞつて見たかと思う。

「人情を尽くす」「情致を写す」「世態情を写す」「觀世写情」さまさまに語は變化しているが、彼が創作上の指針として写実主義を一方に掲げていた事になる。馬琴らの稗史と並んで行なわれた「人情本」の看板「人情」は馬琴の「人情世態」という語であつた事は明らかである。馬琴の文学論の模倣、焼き直しと見られる。

(1) 是は男女の淫楽を誠むる教へにして、勸善懲惡の世話狂言なり。

(春色辰巳園序)

(2) たぐひなく亦新しきうがちなる、美名と花の人情を人にしらしむる為の船ともならん。(春色梅美婦弥、三篇序)

などは、文学談義としては明らかに曲亭馬琴を学んで、売らんがための看板であつた事は明白で、まともに文学評論として取り上げるしる物ではない。看板以上の物ではあるまいが、「誠め」とか「教へ」とかは本音には遠いものがあつた。「新しきうがち」と「人情」とか言うのが、多少は学問を根底に置いているという飾り句句であつた。ただ、人情本は世態人情を写実して極致を知らしらしめようという目標として、馬琴の勸善主義の重苦しい甲冑を脱ぎ棄てた町人になり切つたという点で、新しい写実主義への文芸への道を拓いたのである。馬琴の主知主義から主情主義へ、売らんかなの計算か

ら、期せずして日本文芸の新しい時代への歩みが見られる事になる。この覚え書き、極めて切りが悪い気がするが、私のペンの無器用で、一応切りにする。ただ、あわただしく明治の維新の幕が開いて、ぜひ触れて置きたいのは、馬琴らの位置から逍遙の「小説神髓」などとの距離である。

「小説神髓」を読んで見ると、それが近代批評の出発である事は勿論肯定出来るが、それと同じ強さで馬琴らの近世批評の継承である事が感じられる。それはわれわれが明治をかなり遠くに離して眺めるようになって来たせいであろう。

「小説神髓」の肝腎要め、
小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ。人情とはいかなるものを言ふや。

曰く、人情とは人間の情欲にて百八煩惱是なり。

という定義のやりかたを見ると、馬琴らの小説の観念を抜いたり差したりして、それに多少の近代審美学の知識で解釈を付加して組み立てたかに見える。要するに、それ程新しくないという印象を与える。近世と近代との連続の性格の方が、私にはより強く印象される。私は、いろいろの点で、近世（前後のかなり長い間）は近代前期と見る。言語面でも生活文化史の面でも、近代前期的な性格を見る。歴史の連続を見る。